



結核病棟にて

土村 伸

結核病棟の朝まだき廊下で人がざわめくので、また、だれかが洗面所か便所で倒れたのだろう、と思つてわたしも病室から出て見ると、Aさん、という五十歳半ばの男の患者が、若い二人の男の患者に両側から抱かれるようにして、便所からつれ出され、自分のベッドに帰って行くところだった。

しかし、その朝のときごとはいつともはちがつていた。Aさんは、昨夜消燈後大便所にはいったまま出てこないので、それに気づいた看護婦がドアの外から声をかけると、「まだすみません。気分は大丈夫です」と、何度も同じ返事をするばかりでとうとう夜が明けてしまい、今さっき部長が（自宅からだろう）駆けつけ、ドアをこじあけてつれ出した、というのだった。

Aさんは、水洗便所ではあるが、そしてなにも料想しないで、夜通し便所にしゃがんでいたのである。Aさんは狂った

のだった。

どこの結核病棟もほぼ同じ規格のようだが、物入れ場所と食事をする台（わたしは今その台に向つてペンをとつている）とのほか、ベッドと、その横の幅一メートルばかりの狭い専用空間で、三年、五年、十年以上ものこの病氣特有の長期療養生活が続き、それに当然のように家庭とか一身上の事情がからみあい、さらに結核は伝染する、という敵とした事実から孤独をいられると、気が狂いそうになるのはAさんばかりではなく、また、男ばかりでもないのである。

わたしも入院五年目の初夏から秋にかけて激しい神経症にかかり、「あああ」と一声叫んだらその瞬間から自分を失つてしまひそうな、紙一重の危機を経験したが、一歩か半歩を残して踏み止まられたのは、Aさんよりも幸運だった、というべきだろう。

しかし、化学療法法の進歩した現在では、定期検診などで早期発見された若い患者は、一年間も療養するといつてい社会復帰をするようになった。

が、厄介なのは、近年結核病棟に現われ始めたAさんやわたしのような、六十年前後の老慢性結核患者の著しい増加の現象のようで、最近の結核病棟は、さながら、養老病棟の観を呈しているのである。

この異常な現象のよつてきたるところを、患者のされかれと話して確かめてみると、①療養中の、勤務先の給与の保障が安心できなかったため、入院に踏み切れなかつた。という人と、②定期検診もない職場にいて自分の病気を知らなかつた。

た。という人が一番多く、①②の共通していることは、せめてこともたちの成人までは、と念じて、目をつぶつて働き続けたあげくに、矢張り刀折れてついに倒れた、という、手負いの男ばかりで、

（といえは、わたしのいる病棟で同年齢の女の患者はさほど多くない、のはどういふ訳か）いわば、社会福祉の網の目からこぼれて居るにいた患者の、頭在化しつつある現象のようである。

だとすると、わたしたち老結核患者の大掃除がすすむと、日本の結核病界にもスカッとさわやかなデータが出て、また一つ、大國日本の自慢のたねができることだろう。

と結論づけられてしまつてから、自分も大掃除をされる側になることに気がつき、むらむらとしゃくにさわつてきたので、かくなる上はわたしも一層隠忍自愛し、たとえ三日間でも長生きをして自慢のたねを妨害してやろう、と老ケバ心な奮い起こして決意を固めたしだいである。

悲しいかな、Aさんはそのスクラムを組む前に、ひっそりと死んで行ってしまった。（作家・国立病院入院中）

空気のようなもの

太田 峯子

この頃では「稀少価値」と言われているが、農家の長男のヨメに、農業をするという農家の娘さんがみつかりました。お婿さんの両親、親戚一同は「おとなしくて、気だてが良くて、働き者のお嬢さんがみつかった。一日も早く結婚式

を挙げなければ」ということで、夫は頼まれて「仲人」をすることになりました。自然のなりゆきとして私も行動をとるにもすることになりました。私の飲み仲間、酒の肴に「仲人なんか引受けて、着て行く物は持っているの？」とか「髪はちゃんとセットしなければ」とか「この機会に彼にヨカ着物をつけて買って貰たら？」等と、いらん世話をやいてくれま

見合いも済んで本人同志は「OK」というところまで進んでいたので、気楽な気持ちでお嫁さんを「貰い」に行くことになりました。迎えのピカピカの自家用車のクッションに揺られて、初夏の陽の映える新緑の阿蘇路を心ゆくまで堪能して目的地に向いました。百年以上も経ったかと思われる昔ながらの百姓と云つた大きな古い家でした。本人同志が「OK」だからもう決つたも当然と思つていましたが、なかなかどうしてまだ旧憲法下の昔風の習慣が残つていて「家と家」「父親の意思」が尊重され、娘を手放すことのつらさ、親父さんが自分の目に見えるところに嫁にやりたいたか、で、話しいつまでも空回りでしたが、や

と両親の承諾を得ました。農家の嫁は家にとついで労働力となりながら何十年か先には土地田畑、くどの灰までわがものになるというこでしようか、本人不在のまま、経済も親まかせ、結納のことも結婚式のことも決められて行きます。せめて結婚してから先は実質的に二人でのびのびと自分達は自分達の生活をしてほしいと願っています。

「しあわせな結婚」とか「しあわせな夫婦」とはどんなことだろうかと考えます。私の父は先日あつてなく脳溢血で七十歳で亡くなりました。酒が好きで飲みたいたけ飲んで、自分のしたいことをして、周囲の人からは「いい人だ、いい人だ」と言われ、世間では仲のいい夫婦だと思われてきましたが、亭主関白で母は絶対服従で、酔っぱらつては母を困らせていました。

自分はわがままで母には大分苦勞をかけたけれど、私が死んだら母のことはよろしく頼むと言っていましたので、私は「自分のことは棚に上げて私達に頼むなんてよくそんなこと言えたものね」と言い返してしまいました。五人の子供達がそれぞれ家庭を持って出て行ったあとと田舎の通称「故郷の廃家」に二人で暮らしていましたが父が亡くなった今、母はいろいろな思い出の中で何を考へているのかと思ひます。正直言つて、やつと解放されてこれから自分の人生を自分の意思で暮せるとホツとしているのじゃないかと思ひます。父の生活圏の中で自分を生かし父を通してみた世界の中で、父よりかかってきた生活の中で、いままでの生き甲斐の父が目の前から亡くなつてしまつた時、これからの余生を自分で歩いて行くエネルギーの貯えがあるのかしらと思ひます。

婦人学級や婦人会の集りでも、あと十分すると閉会になるとわかっているのに櫛の歯が抜けるように一人減り、二人減りして行きます。夕方になるとそわそわして夫の幻影に

祈り

田尻 牧夫

おびやかされている人も少なくありません、時には夫の存在を忘れてスカッと何かしてみたらどうでしょうか。私は気の合ったメンバーとエネルギー確保と中年の体力づくりに季節がよくないと山登りをします。公害のうようよしたところを抜けて、息を切らして登つた山頂で広い、広い大自然のパノラマを満喫する時、夫の事など忘れて「ウワー」と大声で叫びます。そして下界におりてきて飲む冷えたビールのおいしいこと、そんなビールが飲みたくて山に登るのかも知れません。空気のようにならなければいいと思ひます。夫に「おれが役所をやめるまではあんまり突飛なことにはするなよ」と常にブレーキをかけられている私です。（主婦）

下通りに入るとある路地口に花売りが店を出していた。ひな菊やパンジー、金魚草などの苗物から、桜草、サイネリヤ等の鉢物、それにアザレヤ、つじ等小さな花木の類が並べられていた。パンジーは鉢植にも露地植にも向くが、花に特有の表情があつて面白い。漫画アトムの「髭おやち」に似たものや、太線の眼鏡を掛けたようなもの、また、しょぼくれた眼付のもの等々それぞれ愛嬌がある。花冠の形から猫の顔に似ているので「猫づら」などと呼ぶ人もある。

その日は、前に立つ客足も少く、折から

の陽気に初老の花売りは、眠気をこらえるのが精一杯の風情で木箱に腰を下ろしていたが、そのような花売りにかのパンジー共がそれぞれとほけた微笑を送つていた。

花売の退屈顔パンジーよ

国鉄三角線を踏切る所から宇土の大通りは東西に伸びており、西へ三分ほど歩いた辺りで船場川とクロスする。川の直ぐ上手には、小さいが堅牢なアーチ型の橋を帯びた石造の橋がある。寂びた造りで、宇土三万石の細川時代のもと思われれるが、今は古い町と町とを繋ぐ役しかなく、人の往来も極めて少ない。

船場川は瀬入り川で、小さいながら瀬が満ちれば舟によつて上り下りが出来る。石橋の一带を船場というが、往時は舟行の便も多く、蔵などもあつて賑いを呈していたのもあろうか。だが、今日ではその面影は全く見られず、川舟を見掛けることも稀で、樹々の茂りが蒼く暗く水面を覆っているのみである。

その下流三、四百米の辺りを江部（えべ）という。川の東寄りや、離れて、こゝに切支丹秘話の主人公天草四郎時貞の生家跡がある。見過しそうな古い角柱が、赤煉瓦の倉庫脇に所在を示して立っている。稲穂を数枚干せるほどの前庭は田に水を張れば、庭すれすれに水がく。母屋は瓦葺だが、これは四郎とは何の縁もなさそうだ。四郎が育つた頃は、船場も賑いを見せていたのだろう。

そこより南は一望の水田である。春は妻の中に点在するビニールハウス等が光り、水豊かな小溝では物を濯ぐ人も見受けける。八十八夜過ぎにはあちこちに苗代

が仕立てられ、整然と短冊型に作られた鏡のように光る苗床に靄が下ろされる。播種の後、床は焼親殺で黒々と覆われる。やがて、そこを通る人は水鏡の走る水の底に、あるかなしかの穢い穢い稲の発芽を見ることが出来る。

苗代の今日萌出でて影もなし苗代の安らぎに立ち今日始まる

案内の人は車を羊角湾の一つの崎岸に止めた。そこからは湾越しに外洋が望まれ、いましも夕日が落ちかかるころであった。祈りたくなるようなその光景に、誰もしばし見惚れた。

両岸に山の迫る湾沿いに、車が再び走り出して間もなく、対岸に崎津の町並を指し示された。中程に天主堂が、一目でそれとわかつた。

宿の夕食を済ますと、暮れた路地伝いにまた天主堂を訪れた。堂内は明々と灯点り、古えの切支丹迫害の絵踏のあつた址と伝える祭壇の前で、夕べのミサが行なわれていた。百畳にも及び畳に坐して老幼の信者達が深々と祈つていた、男も女も木綿緋を着た人が多かつたが、女人は頭からヴェールを被り、みな祈り一途の手を堅く胸の前で組んでいた。多勢の祈りの声が、高く低く振動していた。日既既高かつたが、堂内は小暗く森閑としていて、祭壇の右前に、組緋の中老がただ一人、黙然と祈りを捧げていた。その人の苦悶がこちらの胸にもひびいて来るような長い祈りであった。

高橋祈り欠かさず老いゆくや百合せげ潮焼の手を組み祈る（「鶴」所屬）